

第3章 山城の須恵器生産

山 田 邦 和

第1節 はじめに

かつて筆者は、山城をも含めた京都府における須恵器窯址・瓦窯址について、地名表のかたちで概観したことがある。しかし、前稿では窯址の分布を叙述することに力点をおいたため、生産の展開にかかわる記述は簡略にとどめざるを得なかった。そこで、本稿では山城における須恵器生産の展開を通覧し、それにかかわるいくつかの問題を検討したい。ただし、各窯址群についての概略および参考文献に関しては前稿に譲り、本稿では必要な部分のみを再述することにする。

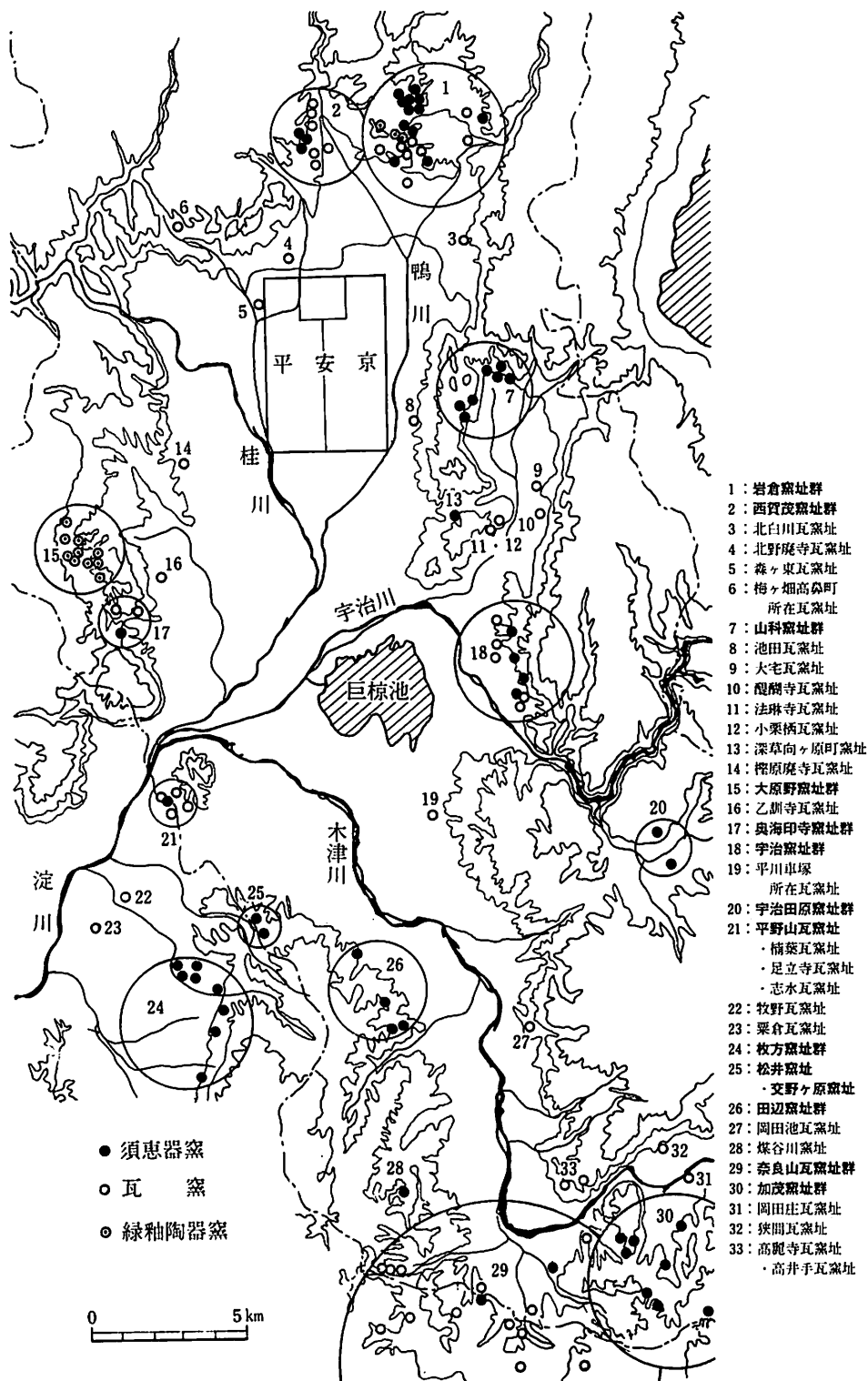
なお、言うまでもなく、「山城」とは平安京遷都以後の名称であり、それ以前の呼び名は「山背」もしくは「山代」でなければならない。ただ、本稿のばあい、両者を厳密に区別することは煩雑にすぎするため、便宜上これを「山城」に統一して論を進めたい。

第2節 山城における窯址の分布

第170図は、山城における須恵器窯址・瓦窯址・緑釉陶器窯址の分布を示した地図である。なお、「窯址群」という名称には、狭い範囲における窯址の密集に限定して用いる狭義の用法と、広い範囲に窯址が散在するばあいを指す広義の用法とがある。前者はたとえて言うならひとつの工房ないし工房群、後者は窯業生産地帯といった意味あいがつよい。本稿では、窯址群の語を広義の用法で使う。すなわち、このばあい狭義の「窯址群」は、広義のその支群であったり、ひとつの単位であったりすることになる。

南山城には、宇治窯址群(宇治市)・宇治田原窯址群(綴喜郡宇治田原町)・田辺窯址群(綴喜郡田辺町)・松井窯址(同町)・交野ヶ原窯址(同町)・加茂窯址群(相楽郡加茂町)・煤谷川窯址(相楽郡精華町)といった須恵器窯址が存在する。ただし、このうち宇治窯址群は、瓦窯や瓦陶兼業窯を含む。瓦陶兼業窯としては、京都府八幡市橋本と大阪府枚方市北楠葉にまたがる平野山瓦窯址(楠葉東窯址)もある。瓦窯としては、奈良山瓦窯址群(相楽郡木津町・同郡精華町・奈良県奈良市)があり、さらに単独立地の瓦窯がいくつか点在する。なお、奈良山瓦窯址群はその一部に須恵器窯址をも含んでいる。

北山城には、大原野窯址群(京都市西京区)・西賀茂窯址群(同市北区)・岩倉窯址群(同市左京区)・山科窯址群(同市山科区)・奥海印寺窯址群(長岡京市)・深草向ヶ原町窯址(京都市伏見区)といった須恵器窯が存在する。このうち山科窯址群は須恵器のみを焼成する。大原野窯址群には緑釉陶器窯が、西賀茂窯址群には瓦窯・須恵器窯が、岩倉窯址群には瓦窯・須恵器窯・緑釉



第170図 山城の窯址分布図

陶器窯が、それぞれ分布する。奥海印寺窯址群は須恵器窯と瓦窯からなる。このほか、単独立地の瓦窯が点在する。

第3節 古墳時代の須恵器生産

山城では、古墳時代後期後半より前の時期の須恵器窯址は、確認されていない。しかし、古墳出土品には、同地における須恵器生産の開始を、さらにさかのぼらせて考えることのできる資料が存在する。そのひとつは、南山城の、綴喜郡田辺町薪堀切7号墳の出土品である²⁾。同墳は古墳時代後期前半に属する円墳であり、直径約15m程度に復元される。墳丘がすでに削平をうけたため、内部構造はわからないけれども、周溝より円筒埴輪・人物埴輪・形象埴輪・須恵器器台を出土した。須恵器は、須恵器編年のTK10型式併行期にあたる。人物埴輪は須恵質の焼成を示すものであり、顔にいれずみ状の文様を刻むことによって著名である。ここで注目したいのは、同墳出土の円筒・人物両埴輪に須恵質のものがあつ、かつ、それらが二次調整にC種ヨコハケを使用することである。周知のように、C種ヨコハケとは、ヨコハケを施す場合に『ロクロ』回転を利用した、須恵器のカキメ調整と同じ技法であり、本来の埴輪製作の技法ではない。そうして、同ヨコハケを使用する埴輪は、和泉西南部・尾張・加賀・遠江などにおいて、須恵器工人が埴輪を製作したばあいの所産であることが知られている。堀切7号墳出土の須恵質円筒埴輪は、口縁端部および底端部にヨコナデ調整を加える点にも、須恵器製作技術の応用をみることができる。また、同墳出土の須恵質円筒埴輪のひとつは、焼け歪みがはなはだしく、普通ならば不良品として廃棄されるようなものである。これは、同墳からあまり遠くない場所において、埴輪製作がおこなわれた可能性を示唆する。

以上のことから、堀切7号墳出土埴輪は、同墳の近辺にTK10型式併行期の須恵器窯が存在し、その工人が同時に埴輪製作にもたずさわつたことをものがたっていると考える。したがつて、南山城における須恵器生産の開始は、少なくともこの時期までにはさかのぼると想定されるのである。また、田辺町美濃山狐谷横穴群出土円筒埴輪には、平行タタキ痕をみるものがあると報告されている³⁾。これもまた、須恵器工人が製作したものであろう。

さて、ここで想定される須恵器の生産は、須恵器工人が埴輪製作にもたずさわるといふ、いわば須恵器・埴輪両生産が分離していない状況である点に、特色がある。須恵器生産と埴輪生産が密接に関連するありかたのひとつが、須恵器工人が埴輪の製作にたずさわつ、須恵器の技法をとりいれた埴輪を残すばあいである。このほかに須恵器生産と埴輪生産がかかわるありかたには、須恵器工人と埴輪工とが、技法的にはたがいに独立しながら、ひとつの窯を共用したばあいや、埴輪工人が須恵器の製作にもたずさわつ、異例の特徴をもつ須恵器を製作したばあいもある⁴⁾。ただ、畿内では、須恵器工人と埴輪工人がひとつの窯を共用することはあるが、そのばあいでも、両者は技法の面ではたがいに独立していることが通例である。したがつて、須恵器工人が埴輪をも製作するという堀切7号墳出土埴輪の生産体制は、畿内としては特異な例に属する。

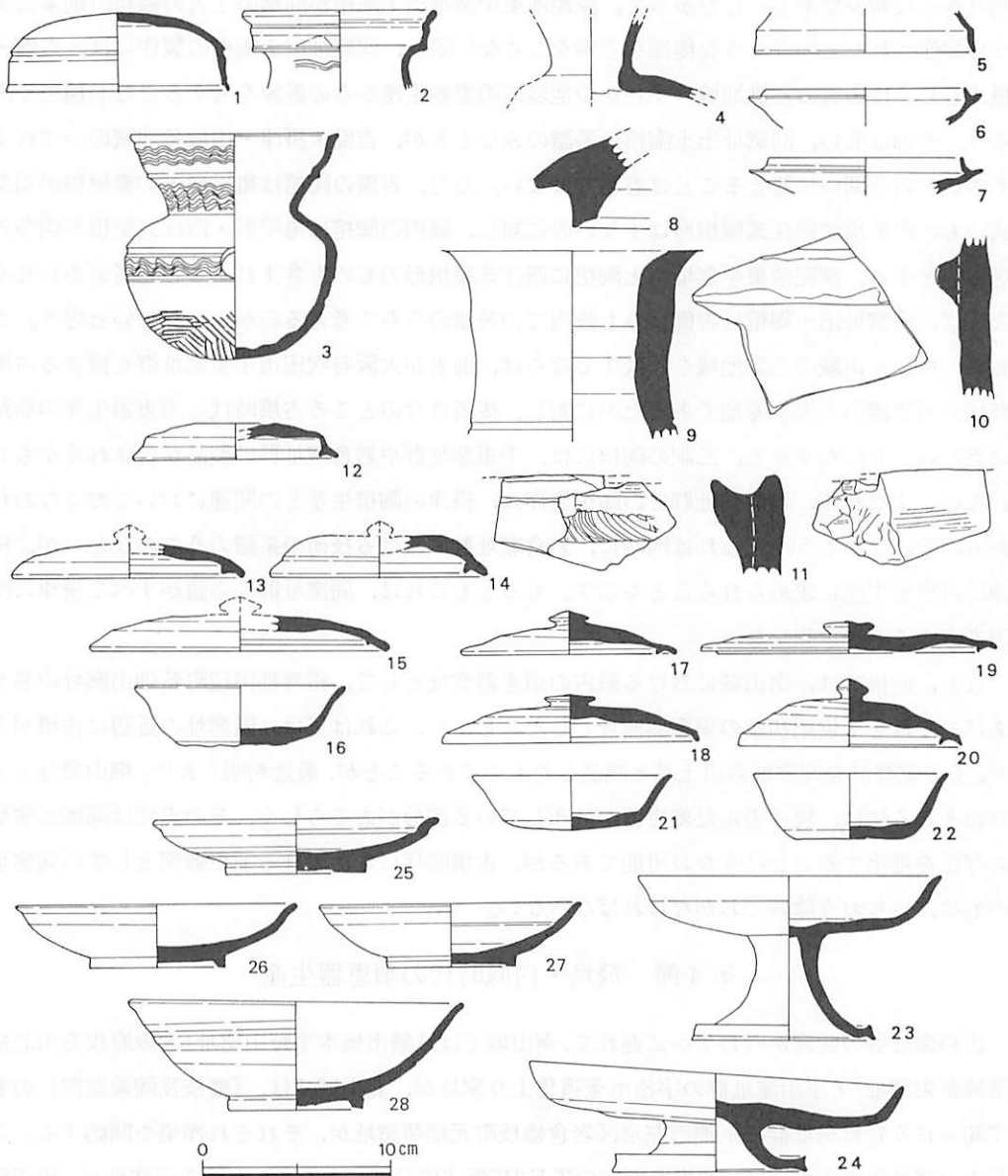
北山城においては、須恵器生産が古墳時代後期後半よりも前におこなわれたという積極的な証拠は乏しい。ただし、京都市左京区吉田二本松町京都大学教養部構内遺跡A P22区4号墳⁵⁾出土の須恵器壺は、やや特異な形態をしめすようである(第171図2)。すなわち、この壺は、口縁部がいわゆる二重口縁を呈し、また頸部に粗い波状文を施す。口縁部のみの破片であるため、体部の形態はわからない。時期は、伴出した須恵器杯蓋からみて、TK23型式併行期にあたる。いわゆる二重口縁とは、須恵器の本来的なものではなく、土師器に特有の形態である。したがって、この須恵器壺は土師器から影響を受けたものと考ええる。土師器の形態をもつ須恵器は、初期須恵器の段階であるならば、中央窯たる大阪府南部窯址群(陶邑窯址群)にあっても、また地方窯にあっても、決して珍しいものではない。しかし、TK23型式併行期というような、須恵器の定形化が達成されたのちの時期までも、土師器から影響を受けた須恵器が存在するのは、地方窯に特有の現象と考えてよい。すなわち、もしこの須恵器壺が地方窯での製作にかかるものであるならば、北山城にも5世紀後葉にさかのぼる時期の須恵器窯が存在する可能性を指摘できるのである。

また、京都市西京区山田葉室町穀塚古墳出土の須恵器甕は、口縁部・頸部・体部にそれぞれ波状文をめぐらす(第171図3)。田辺昭三によれば、この各部のすべてに波状文をめぐらす甕は、大阪府南部窯址群ではまれな反面、地方窯では主流をなすものであり、したがって同墳出土甕は地方窯の製品であるという⁶⁾。同墳出土甕を地方窯の製品とすることには中村浩の異論⁷⁾もあるが、かりに田辺説にしたがうとするならば、この甕も北山城における5世紀の須恵器窯の存在を示唆することになる。

北・南両山城において、須恵器生産が本格的におこなわれるのは、古墳時代後期後半にはいつてのことである。現在知られる最古の須恵器窯址は、北山城の山科窯址群で確認されている6世紀末葉ないし7世紀初頭のものである。京都市山科区北花山大峰町大峰窯址がそれである。同窯址出土の須恵器は、須恵器編年のTK209型式併行期にあたる。わずかに遅れて、北山城では岩倉窯址群が、南山城では田辺窯址群が、それぞれ操業を開始する。前者には京都市左京区松ヶ崎大谷町深泥池東岸窯址(第171図4～11)があり、後者には綴喜郡田辺町興戸宮ノ前窯址がある。両窯址の出土須恵器は、須恵器編年のTK217型式の古い段階に併行する。これらの須恵器窯で製作された須恵器は古墳時代の型式をそのまま引きついだものであり、近辺の古墳出土の須恵器のなかにこれらの窯の製品が含まれていることは、想像にかたくない。

ここで注目したいのは、深泥池東岸窯址において、通常の製品のほかに、須恵質陶棺を焼成していることである⁸⁾(第171図8～11)。同窯址出土の陶棺は、いずれも小片であるが、棺身の口縁部内側に粘土帯をはりつけて溝状の蓋うけをつくるものや、タガ状の凸帯を付したものなどがある。前者は四注式屋根形陶棺である。しかし、後者のばあい、すくなくとも畿内で通有の四注式屋根形陶棺では、凸帯を付すことはない。陶棺で凸帯を付すものは、亀甲形陶棺であるか、もしくは四注式屋根形陶棺で亀甲形陶棺の影響を残す特例であるか、いずれかとみてよい。吉備で盛行する小型陶棺のうちにも凸帯を付すものがあるが、これは陶棺というよりむしろ

ろ骨蔵器であり、また年代も降る。小破片から型式を云々することはいささかためらいもあるけれども、深泥池東岸窯址の陶棺片のうちタガ状の凸帯を付すものは、畿内で通有の四注式屋根形陶棺と考えるよりも、亀甲形陶棺とみるか、さもなくば亀甲形の影響を残す特異な四注式屋根形陶棺とみた方がよいと思う。もしそう考えて誤りないものとするならば、亀甲形陶棺は



第171図 山城出土須恵器実測図(縮尺:1/4)

1・2: 京都大学教養部構内遺跡A P22区4号墳, 3: 穀塚古墳, 4~11: 深泥池東岸窯址(岩倉窯址群), 12: 牛尾窯址(山科窯址群), 13~16: 木野墓窯址(岩倉窯址群), 17~24: 船山窯址(西賀茂窯址群), 25~28: 本山窯址(岩倉窯址群, 27は緑釉陶器) (1・2は註5文献, 3は註7文献, 8~11は註8文献よりそれぞれ転載。12~28は同志社大学考古学研究室保管資料)

土師質であることがほとんどであり、須恵質のものは少ない事実にあらためて注意したい。すなわち、亀甲形陶棺で土師質のものは全国に百数十個の出土が知られるのに対し、同形陶棺で須恵質のものは、備中および摂津にそれぞれ数例、備後および山城の旧乙訓郡域に各1例の出土が知られるにすぎないのである⁹⁾。須恵質四注式屋根形陶棺で亀甲形の影響を残すものの出土例はさらに希少である。したがって、深泥池東岸窯址出土陶棺が同窯の工人の独自の創案によって製作されたというような極端な立場をとらない限り、同窯址出土陶棺の製作には、吉備・摂津もしくは山城の乙訓地域いずれかの地域の須恵器生産からの影響を考慮することが穏当であろう。そのばあい、同窯址出土陶棺の系譜のみなもとが、吉備・摂津・山城各地域のいずれであるかという問いに答えることは容易ではない。ただ、吉備の陶棺は亀甲形・切妻屋根形両型式のものが主流で四注式屋根形は少ないのに対し、畿内の陶棺は亀甲形・四注式屋根形両型式を主体とする。深泥池東岸窯址出土陶棺に四注式屋根形のものも含まれることを考えあわせるならば、同窯址出土陶棺は吉備よりも畿内での系譜のうちに考えるのがふさわしいと思う。さらに、摂津と山城の乙訓地域を比較するならば、前者が大阪府吹田市千里窯址群を擁する古墳時代の須恵器の一大生産地であったのに対し、後者は今のところ古墳時代の須恵器生産の形跡に乏しい。もしかすると、乙訓の陶棺には、千里窯址群や岩倉窯址群の製品が含まれるかもしれない。すなわち、岩倉窯址群での陶棺製作は、摂津の陶棺生産との関連においておこなわれたものではなかろうか。これは同時に、岩倉窯址群における技術の系譜のうちのひとつが、摂津の須恵器生産に求められることを示す。もっともこれは、同窯址群の系譜がすべて摂津に源流をもつことを意味しない。

なお、前稿では、南山城における最古の須恵器窯址として、綴喜郡田辺町薪畑山窯址の名をあげ、これを7世紀初頭の須恵器窯址とした。しかし、これは実は、同窯址の近辺に古墳があり、その副葬品を同窯址の出土品と誤認したものであることが、最近判明した¹⁰⁾。畑山窯址とされたところには、焼け歪んだ須恵器が散布している部分があるらしく、その点では同地に窯址の存在を推定することは今なお可能であるが、古墳時代にさかのぼる須恵器窯としての同窯址の名は、いちおう除いておかなければならない。

第4節 飛鳥・白鳳時代の須恵器生産

山科窯址群の開窯からわずかに遅れて、南山城では八幡市橋本平野山窯址(大阪府枚方市北楠葉楠葉東窯址)・宇治窯址群の宇治市菟道隼上り窯址が、北山城では、『幡枝瓦陶兼業窯』の名で知られる岩倉窯址群の京都市左京区岩倉幡枝町元稻荷窯址が、それぞれ操業を開始する。これらの窯址出土須恵器は、須恵器編年のTK217型式併行期にあたる。これらの窯址が、田辺町宮ノ前窯址・京都市深泥池東岸窯址・同市大峰窯址と相違する点は、瓦と須恵器を同一の窯で焼成する、いわゆる瓦陶兼業窯の体制をとっていることである。隼上り窯址は奈良県高市郡明日香村豊浦寺の創建時の瓦を、平野山窯址は大阪府大阪市天王寺区四天王寺の創建時の瓦を、元稻荷窯址は京都市北区北野廃寺の創建時の瓦を、それぞれ焼成したことが知られる。

ただ、これらの窯で生産された須恵器は、宝珠鈕付の杯蓋などの新出の製品をも少数含むものの、その多くは従来の古墳時代的な製品によってしめられる。これは、古墳葬祭用の須恵器から日常品としての須恵器に移行しつつあった、この時期の須恵器のもつ二面性をあらわす。

なお、山科窯址群は7世紀代を通じて生産を継続した(第171図12)のち、同世紀後葉でほぼ操業を停止する。これは、天智天皇陵の造営にともない、窯址群の範囲が同天皇陵の兆域にとりこまれたからであったようである。

7世紀中葉から後葉にはいると、南山城では、山城と大和の境界にあたる奈良市歌姫町音如ヶ谷窯址が操業する。同窯址は、のち平城京の官窯として発達する奈良山瓦窯址群の嚆矢をなすものであった。ほかに、同時期の須恵器窯としては、田辺窯址群に京都府綴喜郡田辺町多々羅新宗谷窯址、宇治窯址群に宇治市菟道滋賀谷窯址などがある。

同じ頃、北山城では西賀茂窯址群が京都市北区西賀茂大深町大深町窯址・同市同区西賀茂船山町船山窯址(第171図17～24)において操業を開始する。また、岩倉窯址群においても京都市左京区岩倉幡枝町木野墓窯址(第171図13～16)・同町妙満寺前窯址・同町栗栖野5号窯址が生産をおこなう。木野墓窯址は京都市左京区北白川廃寺創建時の瓦と須恵器を併焼し、また栗栖野5号窯址も瓦と須恵器を併焼する。これらの窯址出土須恵器は、須恵器編年のTK48型式併行期にあたる。

この頃、須恵器窯の近辺には、それと時期を同じくして、瓦のみを焼く窯が存在することもある。西賀茂窯址群の京都市北区西賀茂蟹ヶ坂町蟹ヶ坂瓦窯址・同市左京区岩倉幡枝町栗栖野6号瓦窯址などがそれである。また、瓦専業窯は、須恵器窯と離れて単独に立地することもある。京都市伏見区小栗栖丸山小栗栖瓦窯址・同市北区北野下白梅町北野廃寺瓦窯址はその例である。これらの瓦専業窯の存在は、はじめは瓦陶兼業窯においておこなわれた瓦生産が、須恵器生産と分離し始めたことを示す。

なお、小栗栖瓦窯址の製品は、同窯址に隣接する京都市伏見区小栗栖北谷町法琳寺や、西方約600mに位置する同区醍醐西大路町醍醐御霊廃寺に供給され¹¹⁾、また、北野廃寺瓦窯址の製品は北野廃寺に供給されている。寺院の造営にともなって、その境内や至近の地点に瓦窯を築いたわけである。また、蟹ヶ坂瓦窯址の製品が同市上京区上御霊豎町出雲寺に供給されているように、瓦窯と寺院との間にやや距離を置くばあいもある。

第5節 奈良時代の須恵器生産

南山城では、8世紀前半の須恵器窯址として、綴喜郡田辺町多々羅マムシ谷窯址・相楽郡精華町南稻八妻煤谷川窯址・同郡木津町木津天神山窯址などがある。マムシ谷窯址出土須恵器は、ほとんどが杯および杯蓋で、ほかに鉢・短頸壺・長頸壺・平瓶・横瓶・甕・異形皿などがある。器種構成に、皿の通常品を欠く。胎土は砂粒を多く含み、いかにも粗っぽい感を受ける。硯・鉄鉢形土器などの特殊品をみないこととあわせて、生産の目的が在地への供給にあったことを示しているのかもしれない。8世紀前半には山を隔てた地に平城京が造営されたけれども、南

山城の須恵器生産にその影響をみるには、同世紀の後半をまたねばならないようである。

一方、8世紀前半から後半にかけて、大和北部から山城南部の丘陵地帯に数多くの瓦窯が築かれる。これらの瓦窯を総称して奈良山瓦窯址群の名で呼んでいる。そうして、同瓦窯址群の製品は、平城京およびその周辺の寺院に供給されたことが知られている。すなわち、奈良山瓦窯址群は、平城京への瓦の供給を目的に経営された、官営の瓦工房であったと推定される。この意味で、南山城の瓦生産は、8世紀全般を通じて平城京建設の大きな影響を受けたことになる。

なお、須恵器生産について付記すると、マムシ谷窯址出土の有台杯身のなかに、焼け歪んだわけでもないのに、底部中央部が高台の接地面よりも下方に突出するもののがかなり含まれることは、注意しておいてよい。林日佐子が指摘するように、この特徴を持つ杯身は、静岡県に分布の中心を置いており、畿内の窯の製品としては異例の部類に属する¹²⁾。これは、同窯での須恵器生産にあたって、畿内以外の地域からも技術の導入がはかられたことを示しているのかもしれない。

8世紀後半にはいと、南山城では、相楽郡加茂町加茂窯址群・綴喜郡田辺町松井松井窯址・同町松井交野ヶ原窯址などの窯が操業する。なかでも加茂窯址群はこの時期に集中して須恵器生産をおこなったことが知られる。同窯址群が平城京に近く、またその隣接地に恭仁宮が営まれたことが、同地における須恵器生産の開始を規定したと考える。加茂窯址群の加茂町里西門窯址出土品には、通常品のほか、円面硯・鉄鉢形土器・耳付瓶などがみられ、都向けの土器作りにふさわしい種類の多様さを示している。

北山城では、岩倉窯址群が窯場を主に北方の丘陵地帯(京都市左京区岩倉木野町)に移動し、須恵器生産をもっぱらにおこなう。同窯址群の須恵器生産は、8世紀後葉には下火になるようである。西賀茂窯址群も8世紀前葉に須恵器生産を停止する。

第6節 平安時代の須恵器生産

南山城では、9世紀中葉を降る須恵器窯址を確認していない。ただし、これは南山城に限ったことではなく、9世紀中葉をまたずして、近畿地方全体にわたって、小規模な須恵器生産地が衰退する。その一方で、京都府亀岡市篠窯址群・兵庫県加古川市志方窯址群(札馬窯址群)などの大規模な生産地のみが操業を拡大する。すなわち、これ以降の須恵器は、少数の大規模生産地での集約的な生産へと、生産体制の転換がおこなわれたのである。

一方、北山城の窯業生産は、これとはやや違った展開を示す。すなわち、同地に長岡京、次いで平安京が営まれ、それにともない窯業生産が再編成されたのである。両京の造営に使われる莫大な量の瓦を生産するために、官営の瓦工房が営まれる¹³⁾。長岡京で使われた瓦は、大阪府高槻市萩之庄萩之庄瓦窯址・京都府長岡京市奥海印寺谷田瓦窯址などで製作されたものである。

平安京で使われる瓦は、最初、大阪府吹田市岸部瓦窯址・同府枚方市牧野瓦窯址において生産された。わずかに遅れて、西賀茂窯址群がこれに加わる。同窯址群は8世紀前葉で須恵器生

産を中絶していたから、およそ半世紀をへて窯業生産を再開したことになる。同窯址群は9世紀前半を通じて、平安京所用瓦の主要な生産地となる。瓦生産は、西賀茂窯址群にわずかに遅れて、岩倉窯址群にも拡大する。しかし、同期における岩倉窯址群の瓦生産は、西賀茂窯址群に比べて規模が小さかったようである。

岩倉窯址群では9世紀のうちに須恵器生産が復興し、同時に緑釉陶器の生産がはじまる。平安京出土の9世紀前葉の緑釉陶器は、豊富な器種構成と精緻なつくりによって特色づけられる。同期の緑釉陶器を生産した窯址は、いまだ確実なものは発見されていない。しかし、岩倉窯址群の京都市北区上賀茂本山本山窯址の出土品のなかには、古い型式の製品が含まれているようであり、同窯址群の域内に9世紀前葉にさかのぼる緑釉陶器窯が存在すると考えてよい。9世紀後半にはいると、平安京出土の緑釉陶器は器種がほとんど碗および皿に限られるようになり、同時につくりもやや簡略になる。岩倉窯址群の緑釉陶器生産は引き続き盛んになり、本山窯址(第171図25～28)・京都市左京区岩倉幡枝町妙満寺窯址・同区同町栗栖野3号窯址などにおいて生産がおこなわれたことが知られている。

緑釉陶器生産は、9世紀後半のうちにまず京都市西京区大原野窯址群に、10世紀にはいって丹波の亀岡市篠窯址群に、それぞれ拡大する。これらの生産は、10世紀には岩倉窯址群にかわって、京周辺の緑釉陶器生産の主体をなす。大原野窯址群では、同市西京区大原野石作町石作窯址・同市同区大原野小塩町小塩窯址など、約10基におよぶ緑釉陶器窯が知られている。9世紀後半から10世紀前半にかけての緑釉陶器生産の展開は、平安京における同陶器の需要が高まるにともない、一方では製品のつくりを簡略化し、他方では生産地を拡大することにより、量産化をはかったことを示している。10世紀以降には、これら京周辺の製品のほか、東海地方の緑釉陶器窯の製品も平安京にさかんに持ちこまれたことが知られている。

一方、岩倉窯址群では灰釉陶器の生産もおこなわれたことが、最近確認された。京都市左京区岩倉木野町京都精華大学構内2区1号窯址(仮称)¹⁴⁾が発掘され、灰原から灰釉陶器および少数の緑釉陶器が出土したのである。すなわち、灰釉陶器は、東海地方に限らず平安京近辺においても生産されていたことが判明したわけである。

岩倉窯址群の須恵器生産は、9世紀代を通じて存続したようである。京都市左京区岩倉幡枝町妙満寺前窯址・同区同町史跡栗栖野瓦窯跡などにおいて、この時期の製品が確認されている。ただ、9世紀以降、丹波の篠窯址群の須恵器生産が拡大し、10世紀にはいって、平安京への須恵器の供給をほとんど一手にひきうける感がある。そうして、山城で最後まで命脈をたもった岩倉窯址群の須恵器生産は、10世紀を待たずして衰退する。10世紀には、平安京の須恵器の器種も、従来の杯・皿・壺などを主体とする構成から、甕・こね鉢を主体とするものに変化する¹⁵⁾。また、平安京出土の土器のうち須恵器のしめる割合も、相対的に少なくなる。これは、須恵器のもっていた社会的な意義が変化したことを示す。

緑釉陶器の生産においても、平安京出土の同陶器は、10世紀の後半から11世紀にかけて、しだいに近江の製品が多くをしめるようになる。それにともなって、10世紀の終わりには山城・

第22表 山城の主要窯址群変遷略表

	5世紀	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	11・12世紀
北山城	(京都大学 構内遺跡) (穀塚古墳)		山科窯址群 岩倉窯址群 [岩倉窯址群] 西賀茂窯址群	岩倉窯址群	岩倉窯址群 [岩倉窯址群] [西賀茂窯址群]	大原野窯址群 [岩倉窯址群]	[岩倉窯址群]
南山城		(堀切7号墳)	田辺窯址群 平野山窯址 [平野山窯址] 宇治窯址群 [宇治窯址群]	松井・交野ヶ原窯址 煤谷川窯址 加茂窯址群 宇治田原窯址群 [奈良山瓦窯址群]			

世紀ごとに、主要窯址群の盛期を単純化して示した。[]は瓦窯、()は窯址以外の参考資料、それ以外は須恵器窯である。なお、大原野窯址群は緑釉陶器窯址群であり、岩倉窯址群には緑釉陶器窯を含む。

丹波の緑釉陶器生産も終焉をむかえたらしい。

9世紀後半以降には、京周辺の瓦生産にも変化がみられる。瓦生産は、9世紀前半にあっては西賀茂窯址群を最大の生産地としたけれども、9世紀後半をすぎると京周辺の各所に生産地が分散するようである。西賀茂窯址群では、同群の南端に位置する京都市北区大宮中ノ社町河上瓦窯址が操業する。一方、岩倉窯址群の幡枝支群でも盛んに生産をおこなう。同支群の中心部である京都市左京区岩倉幡枝町史跡栗栖野瓦窯跡のある丘陵には、数十基の窯体が眠っているらしい。そのうちの少なからぬ部分が平安時代中・後期の瓦窯址であることは、同窯址群の製品とみなされる同期の瓦が平安京において数多く出土することからも、想像できる。また、岩倉窯址群の花園支群にも京都市左京区上高野小野町小野瓦窯址が築かれ、瓦生産をおこなう。『延喜式』木工寮にみえる小野瓦屋と栗栖野瓦屋は、それぞれ同窯址群の花園支群と幡枝支群に比定される。その他、京都市右京区太秦森ヶ東町森ヶ東瓦窯址や、修理職瓦屋に比定される同市東山区今熊野池田町池田瓦窯址など、京周辺の瓦窯が瓦生産をおこなう。

11世紀後半から12世紀にかけて、それまで平安京に多くの須恵器を供給した篠窯址群の須恵器生産も衰退する。そうして、平安京出土の須恵器は、多くが播磨産のこね鉢および甕によって占められるようになる。京周辺で須恵器生産をおこなうことはもはやない。平安京への瓦の供給は、岩倉窯址群の幡枝支群(栗栖野瓦屋)・篠窯址群などから引き続きおこなわれるけれども、ここでも播磨産瓦や讃岐産瓦などの進出はいちじるしい。

註

- 1) 山田邦和『京都府下の須恵器窯』(『マムシ谷窯址発掘調査報告書』所収、京都、昭和58年)。他に、山城の窯址の分布と窯業生産の展開を概観したものに、田辺昭三『京都の古代・中世窯』(『日本やきもの集成』5所収、東京、昭和56年)、田中勝弘『山城盆地における窯跡とその分布』(『西賀茂瓦窯跡』所収、京都、昭和53年)がある。なお、本稿の窯址分布図(第170図)では、新発見の窯址を加えたほか、前稿の田辺・枚方両窯址群を細分しており、この点で前稿と相違している。

2) 林 正『堀切古墳群』(『田辺町遺跡分布調査概報』所収、京都府田辺町、昭和57年)。同墳出土埴輪については、川西宏幸の教示を得た。

- 3) 久保田健士『狐谷横穴群』(『京都府遺跡調査概報』第8冊所収, 京都, 昭和58年)。
- 4) 埴輪工人が須恵器の製作にもたずさわり, 異例の特徴をもつ須恵器を製作した例は, 奈良県奈良市法華寺町ウナベ古墳出土須恵器, 兵庫県姫路市四郷町坂元宮山古墳出土須恵器などであったと考える。関川尚功『奈良県下出土の初期須恵器』(『考古学論攷』第10冊掲載, 樫原, 昭和59年), 山田邦和『播磨の須恵器生産』(『鴨谷池遺跡』所収, 明石・京都, 昭和61年)参照。
- 5) 五十川伸矢・飛野博文『京都大学教養部構内A P 22区の発掘調査』(『京都大学遺跡調査研究年報』昭和57年度所収, 京都, 昭和59年)。
- 6) 田辺昭三『須恵器大成』(東京, 昭和56年), 64頁。
- 7) 中村 浩『山城・穀塚古墳出土須恵器について』(『MUSEUM』第431号掲載, 東京, 昭和62年)。
- 8) 京都大学考古学研究会『岩倉調査中間報告』(『第36とれんち』掲載, 京都, 昭和59年)。同『岩倉踏査報告VI』(『Trench』35掲載, 京都, 昭和58年)。なお, 筆者採集資料のなかにも, タガ状の凸帯を付し, 外面にハケメ, 内面に同心円タタキ痕を残す陶棺破片がある。
- 9) 村上幸雄『椋山遺跡群』II (岡山県久米町, 昭和55年), 吉岡博之・木村泰彦『山城地方出土陶棺集成』(『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第1集所収, 向日, 昭和54年)。なお, 長岡京市北平尾所在古墳出土陶棺(東京国立博物館蔵)は須恵質亀甲形であるらしい。陶棺については木村泰彦の教示を得た。
- 10) 吉村正親『畑山1号墳出土の遺物』(『京都考古』第36号掲載, 京都府田辺町, 昭和60年)。
- 11) 植山 茂編『小栗栖瓦窯跡発掘調査報告』(京都, 昭和60年)。
- 12) 森 浩一・大井邦明・林日佐子『マムシ谷窯址発掘調査報告書』(京都, 昭和58年), 26・27頁。
- 13) 近藤喬一編『平安京古瓦図録』(東京, 昭和52年)。瓦生産については植山茂の教示を得た。
- 14) 昭和62年, 京都市埋蔵文化財研究所調査。
- 15) 宇野隆夫『後半期の須恵器』(『史林』第67巻第6号掲載, 京都, 昭和59年)。